

玉川**新**人物伝 ①

念仏踊りが私の生きがい。
少女たちの舞いは優美で凜としている。



夏の日差しが山肌にかかる夕刻、南宿の集会所に7歳から12歳くらいまでの少女たちが、なにやら楽しげに集まってくる。しばらくすると笑い声も聞こえなくなり、掛け声やお囃子のなか、真剣な表情で踊りの稽古に励む愛らしい姿が戸のすきまから見て取れる。毎年4月と8月の年2回、東福寺境内で披露される「念仏踊り」の稽古が始まったのだ。

21世紀も受け継がれる「南須釜の念仏踊り」。その裏方で22年あまりを見守ってきた増子さんは、まさに念仏踊りの牽引的存在。

「そもそもの始まりは、60年近く踊られていなかった念仏踊りを昭和27年、当時72歳だった大野ケサさんが、12歳で踊った念仏踊りの記憶をもとに再興したものです。

私が23歳のときに、南宿の青年団で保存会をつくり、東福寺の境内で踊った後、新盆の家を巡る習慣になっ

ていった。」

踊り子となる少女は、それぞれに綺麗な衣装をあつらえてもらい、本番を心待ちにする。彼女たちはあどけないけれど、凜としてすがすがしい身の振る舞いから、念仏踊りを踊る主役としての誇らしさが伝わってくる。そして、2〜3ヶ月の練習で踊りを習得する…。

「無形文化財に指定されてからは、帯とたすきを購入し、横笛や鐘なども一緒に保存しています。最近では、元の民芸工房で念仏踊りの和紙人形をつくり、福島空港やこぶしの里センターで販売している。郷土文化を残そう、多くの人に知ってもらおうという気持ちからか、ありがたいと思う。子どもたちの中にはすぐ覚える子どももいれば、何度も繰り返し、やっと覚える子もいる。(笑)だから、みんなで踊るときの楽しさはいやうもない。」

念仏踊りを多くの人に知ってもらおうと遠征したり、テレビ放映をしてもらったりと次世代へ伝えていくこととする姿には、感服させられる。

「念仏踊りが、地域に生きてきた人々の姿を伝える伝承文化として残るように、まだまだかかわっていくつもりだよ。」

そう語る、増子さんの自宅居間には、娘さんとお孫さんが作った念仏踊りの和紙人形が飾られていた。



増子

Mashiko Tadayoshi

福島県指定重要無形民俗文化財
「南須釜の念仏踊り」保存会会長

忠義

ふるさとと伝承便り

引き継がれる民俗・文化・芸能